

令和2年度 行政対応特別研究評価報告書

課 題 名	和食の健康有用性を踏まえた食選択に関する行動経済学的研究
研 究 実 施 期 間	令和2年度
政策研究の概要	2013年にユネスコの無形文化遺産に登録された「和食」は、栄養バランスに優れていることをその特徴の一つとしているが、健康有用性に関する科学的エビデンスについては十分とはいえず、新たな食料・農業・農村基本計画（以下、新基本計画）においても引き続きその蓄積が必要とされている。 一方、国民の健康志向や高齢化等の食をめぐる市場変化に対応するため、新基本計画では、スマートミール（病気の予防や健康寿命を延ばすことを目的とした、栄養バランスのとれた食事）の普及等の支援、企業連携による健康的な食事の普及等（「健康経営」や社員食堂との連携等）の方向性が示されており、健康寿命の延伸につながる食育推進は、今年度改訂の第4次食育基本計画作成に向けた主な論点の一つとなっている。 我が国においても「食生活の指針」や「食事バランスガイド」、「食事摂取基準(2015年版)」が策定され、情報提供・教育・啓発活動は各地で行われている。現状においては、国が一律に健康な食について何らかの基準を設けることは現実的ではないが、一般に、食の選択については、伝統的な情報提供により個人の行動を変えるよう仕向けるような介入は、効果が薄いと考えられている。このため、本研究においては、個人の選択に委ねながら、緩やかな行動変容のための介入を行う政策手法（ナッジ）の有効性を検証することを目的とした。 「食品」や「食材」の購入をアウトカムとする研究としてはオンラインで収集されるビッグデータが利用可能である。他方、「食事」を対象とする場合は、レストランや食堂等を対象とした研究アプローチとなる。その場合、単一レストラン内のレストランを対象とするケースと、複数レストランを対象とするケースがある、後者であれば介入群と対照群を設けることができるので望ましい。 本研究では、先行研究を整理した上で、将来的な政策へのインプットを念頭に置きつつ、検証すべきナッジを検討した。その際、日本食や日本ならではの取組を反映し、実践的な研究とすることを目指した。このような「仕掛け」は実験的な状況で検証するだけでなく、社会の中で実装されていくことが重要であることから、本研究では健康な食の選択を促すためにどのようなナッジが有効なのか、実験後の一般化も念頭に置いたナッジの設定をレストラン・食堂等を対象とするフィールド実験により検証することを計画した。しかし、コロナ禍により社員食堂の稼働率が大幅に低下している状況を鑑み、実験実施には至らなかった。

評 価 結 果	【評価項目ごとの評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。
○評価委員会名及び開催日 「和食の健康有用性を踏まえた食選択に関する行動経済学的研究」 書面審査により実施 ○評価委員名 安藤光義 委員 （東京大学大学院農学生命科学研究科教授） 川手督也 委員 （日本大学生物資源科学部教授） 茂野隆一 委員 （筑波大学生命環境系教授） ○評価基準 ・社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある A:大きな意義がある B:意義がある C:意義が小さい D:意義は見出しがたい ・政策の企画・立案への貢献 S:非常に大きな貢献が見込める A:大きな貢献が見込める B:貢献が見込める C:貢献は小さい D:貢献は見込みがたい ・学術面からみた研究成果の評価 S:学術的に非常に高く評価できる A:学術的に高く評価できる B:学術的に評価できる C:学術的な評価はやや低い	○社会的ニーズへの対応 A:大きな意義がある（2）、 B:意義がある（1） ○政策の企画・立案への貢献 S:非常に大きな貢献が見込める（1）、 A:大きな貢献が見込める（1）、 B:貢献が見込める（1） ○学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる（2）、 B:学術的に評価できる（1） ○研究計画・研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である（3） ○研究目標の達成度 A:達成度は高い（1）、 B:概ね達成している（1）、 C:達成度はやや低い（1） 【総合評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 2：目標を達成した（2） 3：目標を下回った（1） 【評価委員からの主な意見】 ○コロナ禍終息後に計画した実験が実施されることを期待したい。 ○社員食堂内と社員食堂外をしっかりと弁別して実験の効果を計測しようとしている点は大変優れた研究だと考える。 ○体重やBMI、腹囲、中性脂肪等の数値で効果を計測しようとする場合、その改善度合いに着目しているというものの、個々人の体質の違いなど個体差をどのように考えたらよいかという問題は残るように思う。 ○関連研究のレビューから実際の実験の計画案までよくまとめられており、健康的な和食の普及推進の観点及び食選択の行動変容のメカニズムの解明の観点、ナッジの有効性の検証の観点などから、注目される知見が多く示されており、社会的にも学術的にも意義の大きい研究と評価される。新型コロナウイルスの悪影響のために予定していた実験ができなかったこと、さらには研究を中断するということは大変残念ではあるが、致し方ないと言える。 ○新型コロナウイルスの状況が好転して、早く研究が再開されることが期待されるが、可能であれば、関連研究のレビューから実際の実験の計画案までの成果を

D:学術的な評価は低い ・研究計画の妥当性 S:非常に良い A:妥当である B:概ね妥当である C:やや妥当でない D:妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 S:非常に良い A:妥当である B:概ね妥当である C:やや妥当でない D:妥当ではない ・研究目標の達成度（達成可能性） S:達成度は非常に高い A:達成度は高い B:概ね達成している C:達成度はやや低い D:達成度は低い ・総合評価 1. 目標を上回った 2. 目標を達成した 3. 目標を下回った 4. 目標を大きく下回った	研究レビュー論文などとしてまとめて公表することを検討頂きたい。その際には、今回の外部評価委員会資料の限りでは、全体としてやや「大風呂敷」な書き方となっていて実際に何をどこまで実験して明らかにするかがわかりにくいきらいがあるので、その点を明確にされることが望まれる。また、ナッジのアプローチについて予想される強みと弱み、あるいは可能性と限界（特に後者）について仮説的に示して頂くことが望まれる。先行研究のレビューにおいては、枚挙にいとまがない態度変容や行動変容に関する心理学及び社会心理学の主なものについても触れる必要があると思われる。 ○ナッジ理論を食選択行動に適用した分析であるが、我が国における適用事例は比較的少なく、学術的に非常に興味深い研究である。しかし現在の社会環境においては実験の実施は非常に困難なためアイデアの段階にとどまっているのは、やむを得ない事情によるものではあるが残念である。今後の実証分析の進展に期待したい。 ○本研究は個人の食に対する嗜好、健康情報など高度な個人情報を取り扱う予定である。また研究成果の活用の仕方によっては、ナッジによる食生活の恣意的な誘導と捉えられる可能性も有している。その意味で「研究倫理委員会」のような組織において、研究の倫理性、社会実装時の問題点、データの管理等についてチェックを受け、研究の正当性をオーソライズしておいたほうが良いように思う。国の研究機関が行う研究であるので、この点については十分な配慮が必要であると考ええる。また事前にそのような審査を受けておいた方が安心して研究に取り組めるのではないかな。
今 後 の 対 応 方 針	コロナ終息後に再度行政部局との議論を行いつつ、実験実施の可能性について検討したい。もし実験実施の見通しが立たない場合は、関連研究のレビューから実際の実験の計画案までの成果をレビュー論文等で公表することも検討したい。 また、2019年11月に「農林水産政策研究所における人を対象とする研究に関する倫理規程」が制定されており、新たな実験研究は当該規定に沿って行うこととしている。